

## 利根川の鳥類 (2003 年)

桑原和之<sup>1)</sup>・箕輪義隆<sup>2)</sup>・方波見守一<sup>3)</sup>・白井正夫<sup>4)</sup>

キーワード：神栖、小見川、シギ・チドリ類、湿地、チュウシャクシギ

## 要約

利根川下流域である千葉県小見川から神栖市高浜の水田や河川を中心とした湿地で鳥類の調査を行なった。2003年の調査で野鳥88種と外来種2種が記録された。種数は、チドリ目とスズメ目が最も多く、おのおの27種が記録された。1,000羽を超える個体数が記録されたのはムクドリとスズメ、ユリカモメ、カモメ、チュウシャクシギ、ハイイロヒレアシシギの6種であった。そのうちチュウシャクシギは調査地で罫をとり、最多で1,124羽が記録された。以上の結果から、調査地は水鳥の重要渡来地と考えられた。

## はじめに

湖沼やそれに隣接した湿地である水田は、シギ・チドリ類の採食場所である。水田でも春と秋の渡りの期間には、ダイシャクシギやホウロクシギなどの大型のシギ・チドリ類がみられていた。渡りの時期にはチュウシャクシギ、ムナグロ、キョウジョシギなどの数百羽の群れが普通に見られていた。タカブシギやツルシギなどもかつては、それほど珍しくはなかった。ツルシギの群れは各地で普通にみられており、この種は水田では普通に見られる種であった(小野ら1990)。

チュウシャクシギは水田に広く分散し、日中アメリカザリガニなどの小動物を採食する。ただし、水田で日中観察していてもどういふわけか数羽しかみられないことが多い。夕方になると群れで移動し、「ホイピピピピー」と鳴き声もよく通る声で鳴きながら、罫入りする(桑原ら1984)。夜間、数百から数千羽もの罫をとることがあり、利根川流域でもチュウシャクシギの群れは数千羽を越していた。ただし、河川でのチュウシャクシギの罫の報告はまだ少ない。

著者らは利根川に隣接した湿地で、1980年代から罫の調査を行っている(桑原ら1984)。利根川下流域でチュウシャクシギを中心に鳥類の個体数調査を行ったので報告する。

## 調査地および調査方法

利根川下流域に調査地を設置した。千葉県小見川から神栖市高浜の水田や河川を中心とした湿地である(図1)。調査範囲と調査方法は、桑原1991と同じである。調査地を自動車ですべて走り、車内から確認できた鳥類を全て計数した。確認に

あたっては、8-10倍の双眼鏡を使用し、車内から確認できない場合は、車外に出、20-30倍の望遠鏡で確認した。調査は2003年に23回行なった。調査の結果は表1にとりまとめた。

2003年は、チュウシャクシギの個体数を詳細に調べたので、結果で述べる(図2、写真1)。

## 調査結果

## 1. 2003年の記録種

2003年の観察では、野鳥88種と外来種2種が調査日に記録された。種数は、チドリ目とスズメ目が最も多く、おのおの27種が記録された。1,000羽を超える個体数が記録されたのはムクドリとスズメ、ユリカモメ、カモメ、チュウシャクシギ、ハイイロヒレアシシギの6種であった。ムクドリとスズメの個体数が多くこれは、ムクドリ約30,000羽、スズメ約10,000羽のねぐらが8月29日に確認されたためであった。次いでユリカモメ、カモメの個体数が多かった。水鳥類のうち、種数や個体数が多かったシギ・チドリ類について以下で述べる。

## 2. 春期のシギ・チドリ類の飛来状況

・2003年3月13日(木)13:35-15:20

ツルシギ5羽、タゲリ15羽が水田で採食していた。1970年代であるならばツルシギの群れがみられても良い頃なのであるが、記録数は5羽に過ぎない。まだ、冬鳥が多い。ケアシノスリが1羽みられた。

・2003年4月5日(土)13:35-15:20

ハイイロヒレアシシギが1,089羽観察された。強風により、太平洋洋上から吹き飛ばされてきたが、風の弱い水面では盛んに採食していた。ほと

1) 〒260-8682 千葉県千葉市中央区青葉町955-2 千葉県立中央博物館 e-mail:kuwabara@chiba-museum.or.jp

2) 〒262-0033 千葉県千葉市花見川区幕張本郷1-5-25-102 日本鳥類保護連盟 e-mail:yminowa@ninus.ocn.ne.jp

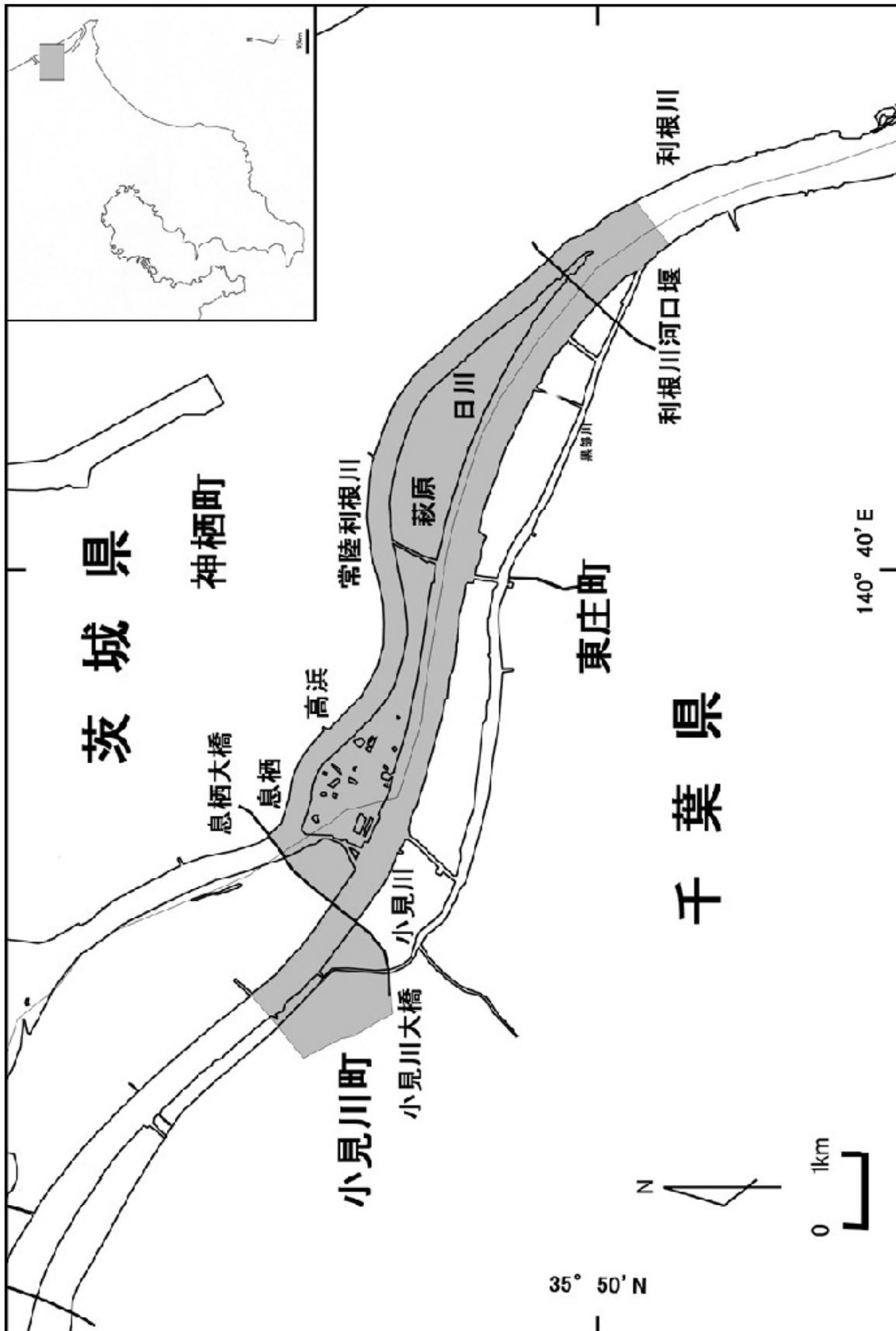


図 1. 調査地

Fig. 1. Study area

んどが冬羽で、中間羽の個体も4-5羽みられた。夏羽は1羽も確認できない。関東のどの地域から、4月5日現在チュウシャクシギの報告はまだなかった。

・2003年4月14日(月) 14:50-16:00

ダイサギが10羽、コサギ101羽が水田で休息していた。4月初旬に一時的にサギ類が増加した。採食しているサギ類も見られ、サギ類は繁殖地に渡ってきた直後であった。シギ・チドリ類の個体数は少なかった。

・2003年4月19日(土) 17:15-18:30(曇り)

南東の風強く、18:00過ぎより降雨。今期初めてチュウシャクシギ、62羽を確認した。オオソリハシシギが3羽混ざっていた。オオセッカの囀りも確認できた。調査地近くの小見川町下小堀新田地区では4月27日17:45にチュウシャクシギ600羽とキョウジョシギ31羽が観察され、4月29日16:30にチュウシャクシギ357羽を確認した。

・2003年5月2日(金) 17:00-19:00

観察地に到着した時点で、水田に降りているチュウシャクシギ24羽を確認した。17:10頃より、数羽から数十羽の群れが飛来した。小見川方面から飛来する群れが多く、時折下流側からも飛来した。低空を鳴かずに飛んでくる個体も多く、見落としをした群れも多かった。集まっている場所は数箇所に分散していたが、18:29-18:39にかけて分散していた群れが1箇所に集結し始めた。湿地に降りたチュウシャクシギは観察場所からまったく見ることができなかったため、埒の位置の特定は難しかった。最終的には比較的狭い範囲に集まり、埒をとった。2日は19:00までに1,124羽を記録した。

・2003年5月10日(土) 16:50-19:10

カウントを始めてから約1時間、チュウシャクシギの飛来は1-4羽単位でなかなか増加しなかった。18時を過ぎた頃から数十羽の群れが飛来するようになり、18:27には約400羽が上流側から調査地の湿地に入ってきた。この日も主に小見川方面から飛んでくる群れが多かった。その後も数羽から120羽の群れが飛来し、19:54までに788羽の埒入りを記録した。

・2003年5月11日(日) 17:00-19:20

小見川方面から飛んでくる群れが多く、数羽から200羽の群れで湿地に飛来していた。1990年代は、一旦埒に入ったチュウシャクシギが何度も舞い上がり個体数の把握も簡単であったが、個体数が少なくなったためか、何度も舞い上がるような行動はみられなかった。低い位置を飛び、埒に入

る集団が多かった。そのため個体数の確認が難しく、桑原は19:00までに約400羽ほどしか記録できなかった。方波見と今井哲夫氏は19:00までに874羽を記録し、その後20羽が埒に入った。11日の個体数は約400羽を採用せず、894羽としたが、先週よりもやや減少していた。

・2003年5月17日(土) 17:30-19:00

この日も小見川方面から飛んでくる群れが多かった。18:00までは8羽と少なく、薄暗くなってから飛来する群れが目立った。11日の観察状況より低く飛び、埒に戻る群れが多かった。群れを確認することが、さらに難しかった。飛んできたチュウシャクシギは、合計955羽で先週よりもやや増加した。

・2003年5月24日(土) 17:00-19:00

臼井、方波見の2名でいつものように夕方、利根川でチュウシャクシギの調査を行った。18:30に4羽、18:35に1羽、18:40に4羽、18:48に6羽、18:50に1羽が埒にはいる。合計で16羽がみられただけであった。ゴイサギが2-3羽で上空を通過し、およそ20羽が記録された。夕方は、オオヨシキリ、オオセッカの鳴き声が多かったが、ほかの種の鳴き声は、あまり記録されなかった。

・2003年5月25日(日) 17:00-19:00

チュウシャクシギ、かなり個体数減り、最終的に11羽がみられただけであった。

・2003年6月2日(日) 17:05-19:10

チュウシャクシギは、17:22に4羽が草地で休息していた。最終的にこの4羽の埒に向かう姿は確認できなかった。

### 3. シギ・チドリ類の記録数

2003年に記録されたシギ・チドリ類は20種であった。春期に記録されたシギ・チドリ類の個体数は多かったが、確認された種数は13種でしかなかった。ハイロヒレアシギの1,089羽の記録は特殊な事例であった。そのほかのシギ・チドリ類は少なく、最多でもキョウジョシギが60羽、タシギが7羽、ムナグロ21羽、タゲリ27羽、ハマシギが3羽、ツルシギ5羽、コチドリとタカブシギ、キアシシギ1羽、が水田でみられただけであった。

夏から秋にかけて12種が記録され、50羽以上が記録された種はトウネン1種であった(表1)。冬期に記録された種数は少なく、タゲリが250羽記録された。

## 考察

### 1. チュウシャクシギの埒

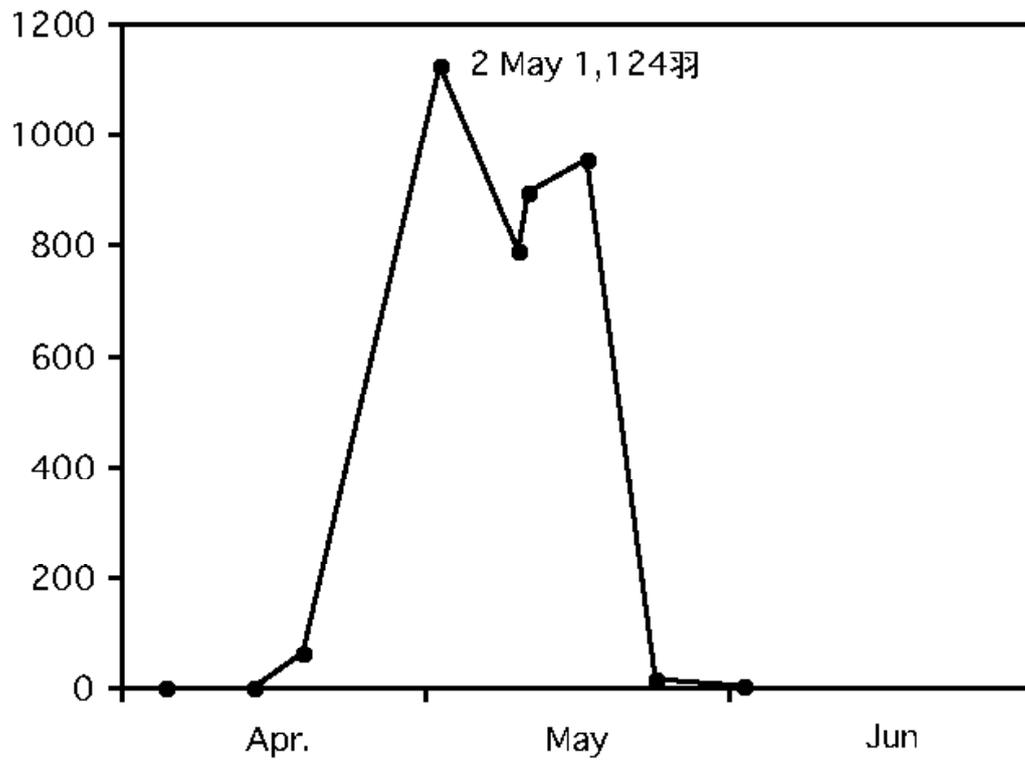


図2. チュウシャクシギの個体数の変動, 利根川 2003 年  
Fig. 2. Number of Numenius phaeopus on Tone river, 2003



写真1. チュウシャクシギの群れ (小見川町小見川)  
2003年5月4日, 埜の近くで休息する. 撮影, 方波見守一  
Photo.1. Flock of Numenius phaeopus .  
Omigawa, Omigawa machi, Chiba on 4 May 2003.  
photographed by Shuichi Katabami

最も個体数が多いチュウシャクシギでも1,124羽であった。1990年代には3,000-4,000羽が記録され、1992年5月8日には3,831羽が報告されたこともあった(桑原ら1993)。2000年以降、3,000羽を超す大きな群れは確認されなくなり、個体数も大きく減少したと考えられる(桑原ら1998)。

千葉県習志野市谷津干潟や船橋市三番瀬でもチュウシャクシギの埒がみられる(桑原・石川1991)。ただし、これらの地域でも個体数は大きく減少した。1,000羽を越えるチュウシャクシギの埒がみられる地域は全国的に見ても稀であると考えられる(桑原ら1994)。

利根川の埒が、シギ・チドリ類重要渡来地であり重要な渡りの中継地であると考えられる。シギ・チドリ類の保護のためには、埒の環境の確保も有効である。河川に隣接した水辺環境も積極的に保護していく必要が有るであろう。

## 2. シギ・チドリ類飛来地保護の重要性

極東地域で繁殖するチュウシャクシギの個体数は、55,000羽と推定されている(Delany and Scott2002)。2003年の観察では1,124羽を観察した。推定個体数の2%を越えるチュウシャクシギが埒をとったことになる。1%である550羽を大幅に越え、ラムサール条約で国際的に重要な湿地とみなすことができた(環境庁自然保護局野生生物課1997)。

## 3. シギ・チドリ類個体数調査の継続の重要性

藤岡ら、1997a、b、1998a、b、1999がまとめたシギ・チドリ全国カウント報告書によるとチュウシャクシギは、全国的に見ても九十九里から利根川での個体数が多くの割合を占めている。湿地環境が失われた地域にはほとんどシギ・チドリ類は、みられない(木幡・桑原1995)。普通種であるチュウシャクシギの個体数もここ数年で大きく減少した。シギ・チドリ類のほとんどの種が、個体数を激減させているため、保護が早急に求められている。

ラムサール登録湿地以外にもこの基準を満たす湿地が、全国には数多くあると考えられる(山城・桑原1991)。また、保護区として運営するためには、その基となる観察記録の公表が不可欠である。重要渡来地域とするためには、観察記録の公表とともに調査の継続も必要である。

## 謝辞

今井哲夫、茂田良光、米持千里の各氏には、貴重な情報をいただいた。石黒夏美、石田スーザン、安井啓子、箕輪友紀子の各氏には、調査に協力し

ていただき観察記録を補足していただいた。波崎愛鳥会の徳元茂・鈴木恒治両氏には、カウントデータや資料を提供していただいた。ここに深く感謝の意を表す。

## 引用文献

- Delany, S and Scott, D. 2002. Waterbird population estimates—third edition. Wetlands International Global series No.12. Wetlands International.
- 藤岡エリ子・藤岡純治・稲田浩三・桑原和之. 1997. シギ・チドリ全国カウント報告書1996秋. 日本湿地ネットワーク, シギ・チドリ委員会, 130pp, 豊橋市.
- 藤岡エリ子・藤岡純治・稲田浩三・桑原和之. 1997. シギ・チドリ全国カウント報告書1997春. 日本湿地ネットワーク, シギ・チドリ委員会, 271pp, 豊橋市.
- 藤岡エリ子・藤岡純治・稲田浩三・桑原和之. 1998. シギ・チドリ全国カウント報告書1997秋. 日本湿地ネットワーク, シギ・チドリ委員会, 265pp, 豊橋市.
- 藤岡エリ子・藤岡純治・稲田浩三・桑原和之. 1998. シギ・チドリ全国カウント報告書1998春. 日本湿地ネットワーク, シギ・チドリ委員会, 271pp, 豊橋市.
- 藤岡エリ子・藤岡純治・稲田浩三・桑原和之. 1999. シギ・チドリ全国カウント報告書1999秋. 日本湿地ネットワーク, シギ・チドリ委員会, 265pp, 豊橋市.
- 木幡冬樹・桑原和之. 1995. いすみ環境と文化のさと周辺の鳥類. 平成6年度千葉県自然環境保全学術調査報告書35-56.
- 環境庁自然保護局野生生物課. 1997. シギ・チドリ類渡来湿地目録. 193pp. 環境庁.
- 桑原和之. 1991. 水郷筑波国定公園・利根川周辺の鳥類. 自然公園自然環境調査報告書:23-16. 千葉県自然保護課. 千葉.
- 桑原和之・石川勉. 1991. 谷津干潟におけるチュウシャクシギ *Numenius phaeopus* の埒での個体変動数 Bull. JBBA6:57-60.
- 桑原和之・久保田克彦・石川勉・田悟和巳. 1984. 谷津干潟におけるチュウシャクシギ *Numenius phaeopus* の埒について. Strix3:6-72.
- 桑原和之・奴賀俊光・箕輪義隆・高木武. 2008. 飯岡海岸の鳥類相. 我孫子市鳥博報 16:1-23.
- 桑原和之・糠谷隆・木幡冬樹・石川勉. 1993. チュウシャクシギの埒. 1993年度日本生態学会大会講演



## Avifauna of Tone river, central Japan in 2003

Kazuyuki Kuwabara <sup>1)</sup>, Yoshitaka Minowa <sup>2)</sup> and Shuichi Katabami <sup>3)</sup> and Masao Usui <sup>4)</sup>

<sup>1)</sup> Natural History Museum and Institute, Chiba, 955-2, Aoba-cho, Chuo-ku, Chiba, 260-8682 Japan

<sup>2)</sup> The Japanese Society for Preservation of Birds, 1-5-25-102, Makuharihongo, Hanamigawa-ku, Chiba, 262-0033 Japan

<sup>3)</sup> The Japanese Society for Preservation of Birds, Ibaraki branch, 600-1 Susaki, Itako City, Ibaraki, 311-2408 Japan

<sup>4)</sup> I-3475 Sawara, Katori City, Chiba, 287-0003 Japan

KEY WORDS: Kamisu, Omigawa, Shorebirds, Wetland, Sandy, *Numenius phaeopus*